



説教要旨「神様は脅迫なんかしません」

使徒言行録 13章 1～12節

古来より、権力者は宗教を利用して人心をコントロールしてきました。また、宗教者も権力者に取り入ることで、勢力を伸ばすという、持ちつ持たれつの関係性が続けられてきました。新約聖書の時代、地中海のキプロス島においてさえ、そうしたことが起こっていたようです。

アンティオキア教会によってバルナバとサウロは伝道旅行へと送り出されました。2人は舟に乗って地中海のキプロス島にわたり、神の言葉を告げ知らせたのです。そこにユダヤ人の魔術師で、バルイエスという名の偽預言者が登場します。人々に“魔術”をやって見せ、神から特別の異能を与えられた預言者だと信じさせたのです。このバルイエスは、この島の最高権力者である総督と交際していました。偽預言者であるバルイエスが、人を思い通りに動かそうとするとき、そこで語られる言葉は、「神の怒り」や「神の裁き」であり、脅迫の言葉です。総督セルギウスは、魔術師バルイエスの脅迫じみた言葉に影響を受けていたのです。

サウロはこの魔術師に向かって「あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵」と、彼を断罪します。これによってバルイエスは視力を失い、彼が何の力ももたないただの人であることが明らかにされました。総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入ったのです。バルナバとサウロの語る主の教え、それは“神の愛”です。この神の愛に触れたとき、もはや“神の怒り”や“神の裁き”におびえる必要はなくなります。

この社会には、神の名を騙り、脅迫して人々を食べ物にするカルト宗教が蔓延っています。悪意に満ちたカルトからどのようにして身を守るのか。その答えがここにあります。聖書が語り、わたしたちが礼拝している神様は、独り子をわたしたちのためにこの世に遣わして下さり、十字架の死を引き受けることによって、神様に逆らう罪人であるわたしたちに救いを与えて下さった方です。この神の愛を本当に信じる者とされたとき、もはやカルト宗教が語る脅迫の言葉におびえる必要がなくなるのです。

(2022・7・24 説教者：稲垣真実)